

ナショナリズムの起源を求めて

——イングランドにおけるナショナリズムの成立——

筒井清輝

1 はじめに

ナショナリズムの起源を具体的にある地域に求めようとする時、最も頻繁に挙げられる固有名詞はイングランドかフランスであろう。ネーションやナショナリズムの系譜をたどろうとする時、この二つの地域を無視して議論を始めることはできない。しかし、それぞれのネーション形成の過程を探ると、その歴然たる違いはすぐに明らかになる。フランス革命という歴史的大事件をきっかけに、ナショナリズムが比較的短期間に浸透していったフランスに対して、イングランドでは漸進的社会改良に伴ってそれが徐々に浸透していった⁽¹⁾。この点に関して、すなわち社会全体へのナショナリズムの浸透に関しては、どちらが先行するかは判然としない。しかし、ナショナリズム、すなわちゲルナーの定義によれば、政治的単位と民族的(national)単位とが一致するべきであるという原理の起源は⁽²⁾、イングランドの方に先に認められると考えられることが多い[Snyder: pp.89,248]。そうだとすると、近代において猛威を振るい、現代にもその勢いを持続させているナショナリズムの起源はイングランドに求められることになる。果たしてこれは歴史的事実として正しいのだろうか。また、もしそうならば、それはいかなる社会状況の中で誕生したのか、あるいは誕生というより、ゆっくり成長し続けその時に成人したとでもいうべきなのだろうか。

また他方では、ナショナリズムの起源を理論的に探ろうという試みも、近年盛んに行われ、多くの成果を上げている。そこでは、ナショナリズムを近代社会に特有の現象と捉える近代主義の主張が強いが、その中でも最も影響力の強い説明原理はゲルナーとアンダーソンのものと考えてよいだろう[Gellner; Anderson]。そして、それらを踏まえ、更にスミスの歴史的連続性を強調する議論を取り込んだ上で提示されたのが、「エトノシズム・ナショナリズム・スタトゥシズム」という私独自の概念枠組みであった[A.D.Smith; 筒井]。これらの議論が真に一般性を持つためには、ナショナリズムの起源とされるイングランドの歴史について有効でなければなるまい。

本稿は、こうした問題意識に基づき、イングランドにおけるナショナリズムの起源を探究し、そこにゲルナーやアンダーソン、そして私の理論がどの程度有効性を持つのか、また、どういった点がそれらの理論からは漏れ落ちているのかを検証してみようという試みである。イングランドのナショナリズムに関する研究は、周りを囲むスコットランドやアイルランドのそれに比べてはるかに少なく、近年ようやく関心を集め始めてはいるが、それも大部分は個別の時代に関する研究である[Hobsbawm:p.11;Newman:pp.XVII-XVIII]。本稿では、ナショナリズムの起源を探るという問題設定上、そうした研究の成果を総合し、歴史的に広い視野にたって考察を進めていくことにする。そこで、まずナショナリズムの起源に関するゲルナーとアンダーソン、そして私の議論を簡単に紹介した上で、それらがどれほど有効であるか、また他にどのような状況が関与していたのかを、イングランドの歴史に分け入って検証していくことにしたい。

II ナショナリズムの起源論

ナショナリズムの起源を探ろうという試みは、ナショナリズム研究の隆盛の中でますます盛んに行われている。しかし、これまでのところ、ゲルナーとアンダーソンの理論に匹敵する独創性と説得力を持つものはほとんど見当たらない。もっぱら文化的側面に注目するアンダーソンの研究と、社会構造上の変化にも着目するゲルナーの理論を読み合わせると、ナショナリズムの起源が実に明確に立ち現れてくる。しかし、理論的には端麗なこれらの理論が歴史的事実と照らし合わせてどの程度まで正しいのだろうか。それを検証する前に、簡単に彼らの理論を紹介しておこう。

まず、産業社会に特有の社会原理がナショナリズムを生み出すとするゲルナーの理論である。ゲルナーは、農耕社会と産業社会での文化の役割の違いに注目する。前者においては、諸個人はそれぞれの社会的位置にふさわしい文化をもっており、文化はそのような社会の分化を永続させ、彼らをその地位に安住させるためのものであった。そこでは少数の支配階級と大多数の農民との間に埋め難い文化的断絶があり、前者の間でも聖職者と官僚の間などで水平的な分化が、後者の間でも地方ごとの垂直的な分化が見られた。このような社会では、文化的単位と政治的単位が一致するべきであるという原理は決して生まれてこない。他方、成長・発展が社会の存続のために不可欠であり、そのために一貫した秩序と効率の良さ、そして社会的流動性が追求される産業社会では、文化がそれらを成し遂げるための高度なコミュニケーション手段として不可欠となる。そして、何らかの一元的な制度体によってその普及が図られねばならず、これが文化的単位と政治的単位の一致を必

然とする。こうして農耕社会では特権階級だけのものであった識字文化が教育によって民衆のものとなり、その教育が国家のような大規模で中央集権的な単位で行われる必要があることから、ナショナリズムが生じてくるのだという。彼が取り分け強調するのは、ナショナリズムは以前からあった要素が覚醒されたものではなく、近代の産業社会が生み出したものであるという点である。このような歴史性を軽視した観点からは、しかし、なぜあるナショナリズムは強い感情的アピールを持ち得、他のナショナリズムは社会の凝集力となり得ないのかは説明できないだろう⁽³⁾。

ゲルナーの社会構造による説明に対して、アンダーソンは近代における出版資本主義の成立によってもたらされた、文化的な想像力の発達に注目する。自分と同じネーションに共時的に属する人々を想像する能力は、近代以前の大宗教と結びついた強固な世界観の解体から可能になった。その世界観とは、(1)特定の聖典語だけが真理に近づく手段を独占しているという観念、(2)社会が高くそびえ立つ中心（支配者たる王）から階序的・求心的に組織されているという観念、(3)宇宙論と歴史とは不可分であり、世界と人との起源は本質的に同一であるという時間観念、の三つである。これらの観念が解体していく中に、印刷・出版技術の発展によって出版資本主義が発達していく。それは聖職者の中で飽和状態に達すると、資本の論理から大衆を対象とするようになり、俗語による出版文化圏を形成していった。そこから「均質で空虚な時間」の観念が浸透し、上述の前近代的世界観を解体し、ネーションを想像することを可能にしたのだ。そして、このネーションが最初に政治的な対応物を持ち、ナショナリズムを主張し始めた場所として、アンダーソンはアメリカ大陸を挙げる。かなりの人的・物的資源を持つようになり、経済的にも自立可能になってきたアメリカの植民地において、相も変わらずそれを属領と考え、重税を課してくる本国に対する対抗関係からナショナリズムが生じてきたというのだ[Anderson:p.191]。彼は、ネーションについては、本来的に限定され、かつ主権的なものとしての「想像の共同体」として定義づけるが、ナショナリズムには明確な定義を与えておらず、アメリカをナショナリズムの起源とする彼の議論の正否は問い難い。彼は公定ナショナリズムや民衆ナショナリズムといった区別を用いるが、こうした分類からはそれぞれの種類のナショナリズムの起源しか見いだせず、それを包括的に考えるには適さないだろう⁽⁴⁾。しかし、上述のような文化的想像力に関する議論からして、ネーションの起源については彼もイングランドやフランスなどのヨーロッパ諸国を念頭に置いていると考えてよさそうである。

以上が、ナショナリズムの起源に関する現段階での最も有力で魅力的な説明であるが、それぞれに弱い部分があることも確かである。そこで、ナショナリズムの近代性を強調す

るあまり、歴史的経験の重要性を見失っているというゲルナーの弱点、ナショナリズム概念があいまいであるためにその起源についての具体的な議論が明確にならないというアンダーソンの弱点の両者を視野に入れ、それを克服するべく提示された私のフレームワークをここで簡単に紹介しておこう。

私の理論の出発点は、一般にナショナリズムといわれている現象を三つに分類するところにある。まず第一に、「さまざまな文化的特徴や遺伝的形質を共有し、それを元に相互の同質性を認め、協力的な社会関係に入った人々の集団」であるエトノスによる主張がエトノシズムと呼ばれる。そして、「構成員に対して制度化された組織体を通じて、その維持存続のために不可欠な最低限の動員を正当に行い得る、最大の人間共同体」であるスタトゥスによる主張がスタトゥシズムと呼ばれる。最後に、エトノスであると同時にスタトゥスであるような集団がネーションで、その主張がナショナリズムとなるのだが、この場合に両者の一致を厳密に追求すると、ゲルナーの言うナショナリズムと余りに掛け離れ、近代ネーションの形成期のナショナリズムがそこからこぼれ落ちてしまう。そこで、それらが一致するべきだという主張もナショナリズムに含めることにし、このような主張を行う集団もネーションと呼ぶことにする。これによって、例えばアメリカ合衆国における黒人の主張のように新たなスタトゥスの形成を明確に目指していないものはエトノシズム、北アイルランドの英国政府に対する主張のように明確に分離独立を主張しているものはナショナリズムとなる⁶⁾。また、スタトゥスは制度的なものであり、本質的には理性的であるが、エトノスは非論理的ないわゆる「原初的紐帯」による結びつきが大きく、エトノシズムの方がスタトゥシズムより理性的な思考によらない行動が多くなるといえる。また、エトノスとスタトゥスという概念は、それぞれいわゆる「民族」と「国家」に近いものであるが、わざわざ別のタームを用いるのは、それらを通時的な概念として扱っていくためである。では、このフレームワークを使って通時的にナショナリズムを考えていくことで、どのような知見が得られるのだろうか。

まず、このフレームワークを用いてナショナリズムと近代化の関係を再構成してみよう。前近代の社会は、ゲルナーの描く農耕社会のイメージと近く、多くの場合支配者と被支配者のエトノスが一致しておらず、同時にスタトゥスとしても一元的な支配が確立していない場合が多い。しかし、近代に入ると、ゲルナーが指摘するような産業化の影響から、一元的な力を持ったスタトゥスが確立され、アンダーソンが指摘するように出版資本主義が識字文化を背景に発達し、それまでは異なるエトノスに属していた人々を同化する過程が始まる。この過程で、近代ネーション形成期に特有のナショナリズムが見られ、その帰結として、ほぼ完全なネーションを形成する場合と同化されないエトノスがスタトゥス内

に残ってしまう場合とがある。前者の場合すべての対外的主張がナショナリズムと呼ばれ、後者の場合には、複数のエトノスがひとつのスタトゥスを単位してまとまって行動するスタトゥシズム、それぞれのエトノスを単位とし、新たなスタトゥスの形成を目指すナショナリズム、それを明確に目指しておらずスタトゥス内での権利の拡大などを主張するエトノシズムの三つが生じることになる。

以上の整理から、ゲルナーとアンダーソンの議論を取り込んだ上で、通時的な分析を行うためのフレームワークが整った。以下では、その有効性をイングランドにおけるナショナリズムの起源を探る中で検討していきたい。

III イングランドにおけるナショナリズム

(1) 「イングランド」の形成

イングランドにおけるナショナリズムの誕生は、一般に中世以降のことであるといわれる。しかし、その基盤となるイングランドという領域的単位は、その時に突然出現したわけではないし、それに対するアイデンティティーも、ある程度はそれ以前の歴史の中で醸成されていたはずである。そして、結論を先取りして言うと、イングランドにおいては、すでに近代にはいる以前から、それがかなりの程度完成に近づいていたのだ。そこで、前近代と近代という中心的な問題に進む前に、その前提となる中世までのイングランドの形態を簡単に検討してみよう。

現在のイングランドと直接のつながりを持つ歴史は、7世紀にアングロサクソン人が移住し、七王国を形成したころに始まるといわれる。イングランド南東部から侵入した彼らは、先住のケルト系ブリトン人を駆逐し北西部に追いやると共に、通婚によって彼らと融合しもした。その中で、アングロサクソン人を中心とする支配体制が固まっていき、彼らが抗争の中でより大きな単位へとまとまり、七王国を形成する。その覇権をめぐる激しい抗争が繰り返されたが、その頃から激しくなったデーン人の侵攻に対して唯一独立を守ったウェセックス王国のエグバートが、同盟関係のもととはいえ、全イングランドを支配することになった[三好：p.61]。その後もデーン人の侵攻は更に激しさを増し、アングロサクソン人は敗北を繰り返したが、ウェセックス王アルフレッドのもとに団結し、878年に何とか平和条約を結ぶ。この時の経験は、イングランドという単位がまとまる上で大きな意味を持った。まず、デーン人という外敵の存在は、名目上統一されたとはいえ、依然遠心的傾向の強かった七王国をウェセックス王のもとに結束させるのに大きな役

割を果たした。また、アルフレッド王はデーン人の攻撃を抑えただけでなく、それによってもたらされたつかの間の平和な時代に、アングロサクソン諸王の法を集大成した法典の編纂や、文化の振興のための古典の英訳や宮廷学校の設定、イングランド最古の公的歴史記録とも言える「アングロサクソン年代記」の編纂などの事業に着手し、国内の統一を図った。これは当時の支配階級の間一体感を形成するのに有効であったが、後にもイングランドの伝統として大きな役割を果たすことになる。更に、10世紀を通じて地方行政区も整備され、10世紀の後半には統一イングランド王国が成立する。

この時期には、人々は戦士の貴族層と一般農民層に二分されており、あいつぐ戦乱のため戦士層の地位が高まり、国王を中心とする封建的主従関係が形成されつつあった。しかし、6世紀から布教の始まったカトリックが9世紀初めまでにはイングランド全域に広がっており、イングランドを西ヨーロッパ世界に組み込んだだけでなく、教会・修道院に大きな力を付与することになった。教会・修道院は精神世界の中心として君臨しており、多くの寄進を集めて経済的にも強力で、ローマを中心とするカトリック世界からの影響は大きかった。地方行政区が組織されるなど、国王を中心とする中央集権的なイングリッシュ・スタトゥスも形成されつつあったが、例えば徴税も王に対するものと教会に対するものとが併存していたように、一元的な支配は確立されていなかった。また、デーン人の侵攻に際して団結するだけのまとまりはあったものの、地方勢力の自立性も強く、スタトゥスとして確立されるのはまだ先のことであった。

一方この時期、人々のアイデンティティーは自分たちの暮らす狭い共同体にあり、同時に宗教世界にもあったため、エトノスは分裂しており、特定しにくい状態にあった。しかし、支配者層の間では、七王国時代の抗争の間にイングランドという単位に対するアイデンティティーが醸成されてきており、ヴァイキングに対する防衛戦の中でそれは更に強化された。そのことは例えば、1051～52年のエドワード証聖王と伯ゴドウィンの間の対立が内乱に至らなかった決定的要因が、「自分たちと同じ民族の者(their own kinsmen; agnes cynnes mannum)」と戦うことに対する嫌悪感であったという記述が残っていることなどからわかる[Reynolds:pp.265-7]。農民レベルでどの程度イングランドという単位に対するアイデンティティーが存在したかははっきりしないが、この時期には奴隷はもちろん多くの農民も農奴状態にあり、たとえイングランドという単位に属していることがわかったとしても、支配者層とアイデンティティーを共有して同じエトノスに属すると考えることはなかったであろう。

10世紀末になると、一時鎮静化していたヴァイキングの侵襲が再び激しくなり、
Kyoto Journal of Sociology II/December 1994

1016年にはデンマーク王子カヌートによってイングランドが征服される。彼の死後、一時ウェセックス王家が復活するが、1066年にはウイリアム1世の征服によってノルマン朝が開かれる。それまでも北欧の文化との接触は繁くなっていたが、これによってイングランドは決定的にフランス系の北欧文化圏に組み込まれる。それまでのイングランドでは、カトリックが広まってもラテン語ではなく彼らの口語である古代英語が法典や文学に使われるなど、独自の文化が発展しており、政治制度や慣習などにも独自性が保持されていたが、ノルマン朝の成立によってフランス系の文化の大幅な輸入を余儀なくされる。政治制度などは、イングランドの方がむしろ進んでいたために、それがそのまま存続したが、言語や宗教の面では大きな影響を受け、英語が被支配階級の言語として貴族の間で蔑まれ、数世紀にわたってフランス語に対して従属的な地位に押しやられた。更に、ノルマン王朝が北フランスを本拠地としていたことから、イングランド自体も複合国家の中の重要度の低い一部となり、属領化されてしまう。1069年からのアングロサクソンの反乱を鎮圧したウイリアムは、フランス系の家臣に恩賞として領土を分け与え、軍役を奉仕とする封建制がイングランドにおいて初めて、皮肉なことにアングロサクソンではない支配者によって、完成された。

こうした中で、イングランドの統一は更に進むのだが、そのために重要な二つの出来事が1086年に起こる。一つ目は、「ドゥームズ・デー調査」と呼ばれる検地である。これは租税帳を作るために行われたのだが、王の意図はそれにとどまらず、これを支配の貫徹のために利用することを目論んでおり、実際細かい地域まで徹底した調査が行われ、国土全体が掌握されることになった【トレヴェリアン:pp.122-3】。もう一つは、諸侯のすべてが王の支配下にあることを宣言した「ソールズベリーの誓い」である。これは、直属の家臣のみならず、下封のものにまで忠誠を要求した点で画期的であり、後にこれが慣習化して、各王のもとに臣下が最大の忠誠を誓うことが義務化された。これらの政策は、ノルマン朝が征服王朝として強大な権力を保持していたために可能となったのであり、ノルマン朝のもとでイングランドはスタトゥスとして確立されていく⁶⁾。また、カヌートもそうであったが、1106年に即位したヘンリー1世は、アングロサクソンの血統を引く女性と結婚することで人心を引き付けようとしており、この時期に早くもエトノス感情の利用が見られる。また、1154年に即位したヘンリー2世は、イングランドから大陸北西部にまたがる大帝国を支配することになったが、そのそれぞれの地域は独自性を保持し続け、融合して一つの単位となることはなかった。そして彼は、行政組織の整備が最も進んでいたイングランドにおいて最大の成果を上げ、中央政府と地方との結びつきを強めたり、国

王裁判所の巡礼を復活させるなどして、イングランドの統一を更に進めた。ところが、ジョン王の政治的失敗から、1206年までにはイングランドは大陸における領土の大部分を失ってしまい、この失地の回復は以後200年にわたってイングランドの政治的目標となる。また、それまではフランス系の諸侯はイングランドに対してわずかな労力しか注いでいなかったが、今やイングランドしか力の注ぎどころがなくなり、その支配に力を入れざるを得なくなった。これが、彼らの間にイングランド貴族としてのアイデンティティーを形成するのに大きな役割を果たした。

こうした中で、イングランドは一時期、スタトゥスとしては北フランスを含む大帝国の一部となってしまふ。しかし、この帝国内では、各地域が独自の法と慣習によって支配されており、王はその間を巡礼するだけであったため、イングランドを独自のスタトゥスと見ることも可能であろう。いずれにせよ、ドゥームズ・デー調査や国王裁判所の巡礼の復活などによって、イングランド全域に渡る支配体制は更に浸透していき、独自の行政機構も発達し、それが後にも残り大きな役割を果たした。それまでたびたび起こっていた海上からの大規模な侵攻もこれ以後はなくなるのだが、これも内部の統一が進み、沿岸の警備が強力になったからである〔トレヴェリアン:p.28〕。ただし、教会領があいかわらず一種の治外法権地帯をなし、宗教改革までは独自の勢力を誇っていたことには注意しなくてはならない〔越智:p.25〕。

エトノスとしても、王を初めとするノルマン人との融合が進み、土着のイングランド貴族たちも当初は進んだフランス系の文化を受容しようとした。しかし、大陸領を失ってからも失地回復のための行動に明け暮れるプランタジネット朝に対して、彼らも反抗を示し、王の権限を制限しようとする中でイングランド人としての意識が高まり、それによって議会の開設やマグナカルタなどの成果がもたらされた。また、大陸領を失った時に、フランス系の貴族はフランス王フィリップ2世とイングランドのジョン王のどちらにつくかを決しなくてはならなかったのであり（両方に仕えることにした者がいたことは、この時期のアイデンティティーの多層性を示す）、これ以後もイングランドに残った貴族たちはイングランド貴族としての意識を強めていったのである。こうして、これらの貴族による王権の制限の成果は、後にイングランド人の誇りとして、エトノス・アイデンティティーの中で大きな位置を占めるようになる。また、ソールズベリーの誓い以降の諸侯による宣誓の慣習化や、貴族の領地が各地に分散しており、彼らがその間を家臣をつれて「巡礼」したことなども、イングランドという単位に対するアイデンティティーの強化に役立ったと考えられる。

一方、農民世界においては、イングランド人意識はそれほど浸透してはいなかった。彼

らは狭い共同体の中で自足的な生活を営んでおり、他者に対する敵意や支配者に対する反感も自分たちが不利益を被る場合にだけ見られ、それがエスニシティーを基盤にしていたとは考えにくい [Hilton:p.40]。しかし他方、恒常的な移民の存在が人口の維持に欠かせなかったためフランスのような強い地方主義が発達しなかったこと、行商人や官僚、兵士によるアンダーソンが言う意味での「巡礼」が見られたこと、貴族の領地があちこちに分散していたことなどは、イングランド人としての一体感を醸成するのに役立っていた。それでも、これらのことから彼らの間にイングランド人としてのアイデンティティーが形成されていたとは言いがたい。「巡礼」は当事者の間では、確かにアンダーソンが言うように、ある一定の範囲の地域に対するアイデンティティーを作り出しもするが、それ以外の人々の間では必ずしもそのようには機能しないのである [Anderson:pp.53-60]。フランスに対する敵意は確かに存在しており、当時の文献にも多く見られるが、この段階ではそれがイングランド全土に渡る広がりを持っていたという証拠は少なく、対仏戦争に参加した人々や、フランスからの攻撃を頻繁に受けた沿岸部の人々の間で強かったことだけが確認される [Hilton:pp.41-43]。

以上で見てきたようにイングランドという領域的単位は紆余曲折を経て、中世までに現在に近いものとなる。そして、そのナショナリズムのあり方は、ゲルナーと私の理論における前近代社会のモデルにほぼ当てはまり、一元的でないスタトゥスと細分化されたエトノスの存在が確認された。しかし、後に重要な役割を果たすフランスに対する敵意は、上述のような事情からすでに形成されつつあり、イングランドに対するアイデンティティーも、取り分け貴族層の間ではかなり浸透していたといえよう。また、ローマ教会に対する反感は、それによって取り立てられた税金がまったく自分たちの利害を反映していなかったにもかかわらず、王が政治的事情からそれに従わざるを得なかったという事情から蓄積されており、国教会設立へのコンセンサスはすでに整いつつあった。それでも、ゲルナーが言う意味でのナショナリズム、すなわち政治的単位と民族的単位とは一致するべきであるという観念はまだ見られず、王や貴族のエスニシティーそのものが問題になることはなかった。

ここで注意しておかねばならないのは、この時期のイングランド王は大陸のガスコーニュ地方にまだ領地を保持しており、そのためにフランス王の臣下であるフランス貴族でもあったのであり、その帰属を巡ってしばしば争っており、それが百年戦争の一因でもあったということである。このことにスコットランド問題や、直接は十字軍用のフランス軍が

その中止によってイングランドに向けられたという思わぬ理由が加わって、英仏間のいわゆる百年戦争が1339年から始まった。この戦争は、すでにかかなりの統合が進んでいたイングランドにとって敵としてのフランスがはっきりしており、傭兵だけでなく一獲千金をねらった一般からの徴兵も参加したためもあって、イングランドのエトノシズムを強化すること大であった。この時にも教会への税金がローマを通して敵国のフランスへと流れていることが、反教会・反聖職者感情を強めた。また、イングランドの目標はガスコーニュ地方の主権確保からしだいに伝統的な失地回復へと広がり、ヘンリー5世のころにはそれがはっきりと目標とされていた。この目標は、ヘンリー7世としてチューダー朝を開くことになるヘンリー・チューダーが、1483年にフランスとイングランドが異なる単位として統治されることを確約するにいたるまで掲げられ続けた。

また、この戦争中の軍資金のための課税も次第に大きな負担となり、議会の承認なしに課税することができないことが再び確認されるが、貴族たちもそれぞれの利害によって王の強い権利を利用しようとするようになり、それが王位継承権問題と絡むにいたり、1455年から薔薇戦争が起こる。これはすでに力を弱めていた貴族と、立身出世を果たしつつあったジェントリーやナイト官僚などの新興勢力を国王候補を中心に二分した戦いであったが、中心としての王が、王に正統性の源泉を求める新興勢力の支持を背景に強大な力を確保するに至り、私闘に明け暮れる貴族階級の没落を早める結果をもたらしたといえる⁷⁾。こうして封建秩序の再編成が起こると共に、王の政治的・財政的基盤が確立されて、イングランドにおける絶対王政が成立してくる。そして、フランスとスペインという二大超大国が覇権争いを繰り広げ、イタリア戦争を契機として近代的な国際社会が形成される16世紀のヨーロッパ世界の中で、イングランドも小国ながらひとつの単位として大きな役割を果たすようになる。この国際社会での経験も自己の領域と独自のアイデンティティーの確認に大きく寄与したといえよう[越智:pp.4-22]。

(2) ナショナリズムの起源

以上のように、イングランドにおいては近代に入る前からそれに対するアイデンティティーが醸成されつつあった⁸⁾。それでもやはり、ゲルナーが言うようにそれが社会全体を完全に取り込んでいたとは言い難い。そして、ゲルナーによれば近代以降にそのようなナショナリズムのあらゆる層への浸透が起こり、アンダーソンが言うように人々のアイデンティティーが宗教世界と生活共同体からネーションへと移行してくるはずである。ここではこうした点を、前節と重なる部分もあるが、16世紀以降のイングランドにおいて検討してみよう。

まず第一に、近代社会においてあらゆる階層にナショナリズムが浸透していくのはなぜなのだろうか。ゲルナーによれば、それは均質で流動的であり、相互に高度なコミュニケーションが可能な労働力を必要とする産業社会の要請によるのであった。しかし、イングランドにおいては17世紀にはネーションが形成されつつあり、宗教改革以降ローマ・カトリック勢力と対抗する中でナショナリズムも見られており、それは18世紀から始まる産業革命に明らかに先行している。産業化がナショナリズムの浸透を助けたとは言えるかもしれないが、産業社会発祥の地イングランドにおいては、それをネーション形成の原因と考えることはできない⁽⁹⁾。イングランドにおいては別の理由、すなわち社会の流動化の方にその原因があったのであり、この意味ではゲルナーの主張も半分は当たっているといえる。そこには、前節で指摘したように、薔薇戦争によって諸侯が没落し、王の支配を支えるエリート階層が業績主義的に選ばれるようになったことが大きく関係している。チューダー朝の評議会には、大学教育を受けた中流階級が多数採用されていた。取り分け、カトリック勢力の影響を離れ、中央集権化を果たそうとしていたヘンリー8世がそのための道具として大学に注目し、それを聖職者の養成期間からエリート養成期間へと転換させたことは重要であった。16世紀の半ばには、「上流階級(nobility)」は出自によってではなく、個人の能力・業績によって決定される場合が多くなり、大学教育が非常に重要になってきていた。17世紀半ばに行商人によって販売されたチャップ・ブックと呼ばれる読み物の中には、「徒弟物」と呼ばれる、無一文の少年が創意と企業心で富豪化する成功物語のジャンルがあり、広い人気を博していた。このことは社会的上昇を求めて移動する若者の存在と符合しており、同時に後に述べる識字率の上昇をも証明している。こうして多くの人が社会的上昇の期待を持って教育の機会を利用し、いわゆる中流階級が大幅に増加した。そして、貴族階級に対して彼らの正統性を主張するためにもナショナリズム（ここでは、例えばイングランドの利益・発展のためという文脈で）が持ち出され、彼らの代表と考えられた議会の力は王にとっても無視できないものとなり、政治は王と聖職者による神権的なものから、教育を受けた者による民主的なものへと移行しつつあった⁽¹⁰⁾。ただし、注意しなければならないのは、16世紀後半になるとジェントルマン層の教育熱が高まり、大学生が下層から中流階級の子弟からジェントルマンの子弟中心に変わっていったことである。これによって結局はジェントルマン階層の支配が続いたのであるが、それが正当性を得るために教育が必要となったことは大きな変化だろう。また、宗教改革によって教会による最も基本的な教育が行われなくなり、中等以上の教育を受ける者が増える一方で、最低限の教育も受けられない人々も増えていった。こうして、中流以上の人々にとってはイング

ランドの政治的・文化的生活に参加する機会が増えていったが、他方でそれ以下の人々との格差は広がっていき、これが後の階級対立を生み出す元となった[ライトソン:p.14]。

次に、宗教世界からネーションへというアイデンティティーの転換は、いかにして起こったのだろうか。これについては、ヘンリー 8 世の離婚問題に絡んで成立した国教会と、それと同時期の英訳聖書の出版が重要である。もともと、ローマの出先機関としての教会の存在は、民衆にとってローマ教皇庁による搾取の象徴であり、反聖職者感情はナショナリズムと一体化して宗教改革を支えることになった。1533年の「上告禁止令」では、国内の問題をカンタベリー大司教を越えて、直接ローマに上告することが禁止されたが、その根拠としてイングランドが「エンパイア(empire)」、すなわち当時の意味では「外国から独立した主権国家」であることが挙げられている[大野:p.404]。また、財政難を乗り切るために、より効率よく徴税を行いたいという王の思惑もあった。このように、イングランドにおける宗教改革は、ローマからの影響を断つためという政治的性格や財政上の問題と絡んだ経済的事情が強く、教義上の問題はほとんど取り上げられなかったほどであった。また、宗教改革に伴って修道院領が没収され、イングランド領すべてが完全に王のものとなり、スタトゥスは更に確固たるものとなっていく。教皇から独立した宗教的単位の形成の意味は大きかったが、それは誰もが読める英訳の聖書の存在に負うところも大きかった。母国語の聖書は、それ以前にもフランスやイタリア、オランダ、ドイツなどで出版されていたが、それらはイングランドにおける程大きな意味は持たなかった。その理由としては、まず、プロテスタンティズムが聖書を直接読むことが神の国へ近づく道だと教えていたことが強調されねばなるまい。更に、識字能力を身につけることが社会的成功にも有利であったために識字率が高まり、しかも16世紀前半には読むべきものとして聖書が最も手近であったことも重要である。また、聖書を読むという行為は、教会で説教を聞くことなどに比べて極めて個人的なことであり、それによって神に近づけることから、個人の尊厳の重視というイングランドナショナリズムの重要な特徴も派生してきたといえる。更に、それを正確に読むことの必要性から、物事を正確に捉えること、すなわち科学主義が出てきたとも言われる[Greenfeld: p.54]。

また、ヘンリー 8 世、エドワード 6 世に続いて即位したメアリーがカトリック回帰を強硬に推進したことも、逆に新世代のエリート層の団結を強めた。彼らはプロテスタンティズムとナショナリズムを結びつけ、取り分け個人の尊厳や民衆の権利を強調して、支持を広げていった。ここにおいて初めて、ネーションと王とが分離され、前者の方が優先されるという事態が起こる。続いて即位したエリザベスはプロテスタントであり、プロテスタンティズムとナショナリズムを媒介して強い支持を集めた。イングランド人は神に選ばれ

ており、そこにエリザベスが使わされたのだというレトリックが使われるようになり、エリザベスの健康やその良い統治、無敵艦隊の撃破などがその証左となっていた。ローマ教会によるエリザベスの破門に際しても、人々はエリザベスを支持しており、その後のカトリック諸国からの攻撃によって逆にそのアイデンティティーは強くなっていく。こうして、プロテスタントイズムにくるまれ、媒介される形で、ローマからの影響力を排しようというところから始まったナショナリズムが、イングランドに広く浸透していくのである。1603年に即位したスチュアート朝のジェームズ1世は、圧政と共に、フランスやスペインなどのカトリック勢力に従属的態度をとったためにナショナリズムを刺激し、反感を買った。このようなスチュアート朝のカトリックよりの政策は二つの革命を誘発する。このようにカトリックとの対抗から生まれたイングランドのナショナリズムであったが、イングランド国教会の宗教性の希薄さ、その教義の世俗的・科学主義的傾向から、それが宗教色を失っていったのも自然な成り行きといえるだろう。

また、文化の面でも、イングランドにおいては大陸に対するコンプレックスがあり、イングランド文学の称揚も行われたが、彼らのプライドを満足させるには至らなかった。そこで彼らは、文化を古代のものと近代のものに分け、大陸で盛んな古典的文学は古代のものであり、これからは自分達の理性に基づく近代の文化が中心となっていくのだとして納得していた。古典的教養ではどう見ても大陸諸国家に勝ち目のないイングランドでは、科学の発展がその文化的ナショナリズムを満足させるものであったのだ。そして、実際にネーションを挙げての科学研究への支援が行われ、数々の成果が挙げられた。それらはヨーロッパ諸国に喧伝されそこでも高い評価を受けた。こうして近代的な科学や理性といった価値のすばらしさが認められ、それらはイングランドのナショナリズムの大きな特徴となっていた[Greenfeld:pp.79-86]。

以上のように、イングランドにおいては16～17世紀に、教会の支配を排除して、スタトゥスが一元的なものとなり、流動性の高かった中流以上の階層で、ローマ教会やフランスとの対抗関係からエトノスが形成され、ネーションが出現してくる[A.G.R.Smith:pp.88-90]。そしてここから、下層の分裂していた諸エトノスを同化する過程が始まり、ナショナリズムが浸透していくのである⁽¹¹⁾。

(3) ナショナリズムの浸透

前節で見たように、16～17世紀の間にイングランドはスタトゥスとして確立されており、また中流以上の人々の間ではナショナリズムも誕生していた。18世紀半ば以降、

新聞や雑誌などのメディアの発達や道路の整備による旅行の増加などで国内でのコミュニケーション・ネットワークが確立されたことや、イングランドが断続的に対外戦争に関与していたことなどから、それは更に浸透していった[Colley:pp.100-2]。しかし、下層の人々にはいまだナショナリズムは見られず、産業革命を経て「二つの国民」といわれるように階級間の壁がますます厚くなっていく中で、ナショナリズムの浸透は一種の停滞状態を迎える。下層階級におけるナショナリズムの欠如を端的に証明するのが、フランス革命後のナポレオン軍の侵略の可能性に対する反応である。そこで、フランス革命に対するイングランドの反応を検討してみよう。

中流以上の人々のフランス革命直後の反応は、急進主義者が強く支持したのをはじめ、一般にもどちらかといえば好意的なものであった。イングランドでは伝統的にパトリオットという概念が、愛国者という意味と同時に、民衆の権利を擁護するリベラルな改革主義者という含意を持っており、パトリオットを名のる急進主義者たちは、フランス革命の自由と平等、人民主権といった理念に共鳴し、それらをイングランドでも達成されるべき目標であるとしていた。しかし、王の処刑から対仏戦争の勃発のころになると、しだいに同情的な意見は減り、急進主義者の取り締まりも行われるようになり、フランスの侵略が現実味を帯びてきた1798-1803年のころにはそれがピークに達する。イングランドが独自に築きあげていた富と議会制が万民に平等な機会を与えるものとして誇られ、伝統的に存在するフランスに対する敵意と相まって、急進主義者を親仏主義者とする攻撃が行われるようになったのである。こうして当初は自由の理念と戦うこととまで言われた対仏戦が、自由を守る戦いになったのである。この転換において重要であったのは、フランスが侵略した国々において、自由を広めるところか、圧政をしいていたことで、特にイングランド人にとって自由と独立の象徴とも言えるスイスにおけるフランスの圧政とスイス人の反抗の情報は大きな影響を持った。こうして急進主義者といえどもフランスを支持することは難しくなり、イングランドの自由も完璧ではないが、フランスのそれよりはよほどましであると考えられるようになった[Dinwiddy:p.65]。

一方、この時期の下層階級の意識はどのようなものであったのか。残っている資料は文字を読める階級のものばかりであり、そこには反仏的な言説が多いが、下層階級の間でも伝統的には親国王的な反仏感情は根強かった。しかし、戦争が進むにつれて、次第に経済状態は悪くなり、戦争の成果もそれほど上がらず、政治的意思決定の場からも締め出されていた人々は、戦争に反対し、王にも反抗を示し、ついにはフランスに支配された方がましだという言説も見られたほどであった[Cottrell:pp.261-2]。中流以上の人々が、フランスとの対抗関係からナショナリズムを育てていたのに対して、下層階級は依然中世的な支配

者観を持ち、そのエスニシティーなどにこだわっていなかったことがわかる。支配者層もこうした民衆の不满を察知し、伝統的な反仏主義と王に対する忠誠心に訴えかけ、戦争への支持を取りつけようとし、それはかなりの程度成功した⁽¹²⁾。それゆえ、この時期の言説に見られる反仏の強い敵意は、民意を反映したものというよりは、それを鼓舞するためのものと見るべきであろう。しかし戦争中の重税に対する不満は、戦争は支配者にとってだけ恩恵のあるものであるという考え方を生み、階級分裂の大きな火種となってしまった [Dinwiddy:pp.69-70]⁽¹³⁾。

そして、1830～40年代には、特に激しい階級対立が見られた。しかし、その成果として選挙権の拡大や生活の向上がもたらされたこと、イングランドに未曾有の繁栄が訪れたことは、階級分裂を抑制するのに有効であった。1850～70年代には、人々は上層のジェントルマンに敵対するどころかそれを目標として少しでもそこに近付こうとするようになっていた。ここで重要なのが植民地の存在である。ジェントルマンであるためには土地を持つことが必要であったが、イングランド内では土地の量は物理的に限られていた。しかし、植民地に土地を持てば、本国に領地がなくても、擬似ジェントルマン化することが可能になった [川北:p.223]。実際、国内ではジェントルマンに批判的な人が、植民地に出向いてジェントルマン的態度をとりたがるという光景は、ジョージ・オーウェルによって描かれたように一般的なものであった。このように、この時期にはイングランド人であること自体がある程度の地位、すなわち自分より「下の者」の存在を保証しており、これによって自分より「上の者」に対するルサンチマンは大幅に解消されたと考えられる。1832年の第一次選挙法改正は、ブルジョワ階級を含む中流階級にまで選挙権を与えることで彼らを地主階級の支配体制に取り込もうとするものであった。更に1834年の「救貧法」は、貧民の救済を中央政府が行うもので、地方行政が初めて中央の監督を受けるようになった例であり、こうした中でスタトゥスとしては、産業社会の要請にこたえる形で中央集権化は更に進む。そして、1867年の第二次選挙法改正において、都市の労働者階級が、1884年の第三次選挙法改正においては農業労働者にまで選挙権が拡大された。また、40年代から70年代には、ジェントルマン教育の門戸を中流階級に開くことがしばしば見られ、官僚の採用が縁故によるものから試験制度に変わったことと同様、地主階級の支配体制に中流階級を取り込もうとするものであるといえる。貧民の救済にも熱意が注がれ、労働時間の制限や児童・女性労働者の保護などの政策がしだいに整備され、労働者の生活も次第に豊かになっていく。こうした政策はジェントルマン理念、より大きく言えばイングランドのナショナリズムに特有の個人の尊重や慈愛、そして社会をよりよ

く改良していこうという理念から論理的に出てきたものであり、それに成功することがイングランド人が神に選ばれていることの証しとされた[Kohn:p.178]。このこと自体は評価されるべきだろうが、同時に帝国の繁栄による経済的余裕が大きかったことや、植民地において労働力が確保できたこと、そしてもっと重要な新しい産業化の時代を見据えて地主階級がその支配を維持するために、下の階層の人々を取り込みその不満を最小限に食い止めようとしていたことも指摘しておかねばなるまい。ともあれこの時期は、大英帝国の拡大とそれに伴う繁栄を背景に、イングランド内部での大衆の権利が拡張されていった安定した時代であり、すでに17世紀から形成されつつあったイングランドのナショナリズムは、階級差を越えて深く浸透していき、この時点で完全に確立されていたといえる。

以上のような歴史的経過を見ると、ナショナリズムの浸透という局面については、ゲルナーとアンダーソンの説明は大まかなモデルとして非常に有効であることがわかる。産業化は確実に社会を同質化し、下層階級にも教育を与える必要をもたらしたし、識字率の上昇に伴って新聞や雑誌、小説などのメディアがネーションの想像を可能にしたのも間違いない。しかし、下層階級に初等教育の機会が保証されるのは1870年の初等教育法まで待たねばならず、ゲルナーが強調する教育の問題よりも、むしろ選挙権の拡大や帝国の繁栄による利益などが重要な要因であったとも考えられる。また、アンダーソンの議論については、メディアだけでなく、道路交通の整備によって国内旅行が盛んになったことも「想像力」を強化した点、同質な内部と同時に敵としての外部も「想像」できるようになったことも重要である点を指摘しておかねばなるまい。この点は取り分けイングランドの場合には重要で、イングランドのナショナリズムは誕生も浸透も、フランスという外敵の存在なしに考えることはできない。

IV 結論

以上、概括的にだが、イングランドにおけるナショナリズムの形成・発展の歴史を振り返ってみたが、そこから、II章で見た議論につけ加えるべき知見が得られただろうか。まず、その歴史を簡単に振り返ってみよう。イングリッシュ・スタトゥスは、13世紀初頭に大陸の領土の大部分を、そして15世紀後半に完全に失う中で確立されていき、16世紀前半にローマからの影響を払拭するにいたってほぼ完成する。イングリッシュ・エトノスも上層階級ではそれとほぼ平行する形で発展し、16世紀には確立され、スタトゥスと重なり、イングリッシュ・ネーションが形成される。宗教改革はローマからの政治的影響力を断ち切ろうとする動きであり、イングランドにおけるナショナリズムの最初の発現、

すなわち近代世界におけるナショナリズムの起源といえるだろう。それは、ゲルナーが言う産業化の影響などまだまったく見られない時代であり、薔薇戦争以降社会の流動性が高まったこと、ローマ教会とフランスの影響力に対する反感が強かったことなどが原因であった。

ここで、こうした歴史的事実をナショナリズムの起源論と照らし合わせてみるとどのようなことが言えるだろうか。まず、外敵の存在という重要な論点が看過されていることがわかる。そして、ゲルナーの理論については、流動性が高まることがナショナリズムの発生を促すという点は正しいが、それが産業化と必ずしも関係していないこと、それが前近代からの長い歴史的経験の中で形成されてきたものである点がやはり強調されるべきであること、などが言える。アンダーソンの議論については、内部の同質性を「想像」することと同様に、それと並行しておこる、外部の敵の「想像」も重要であることを指摘しておかねばならないだろう。そして、私の理論に位置付けるならば、上層にナショナリズムが形成されたこの時点が、諸エトノスの同化過程の開始点といえる。

こうしてナショナリズムが誕生したのだが、この時点では下層階級との間にはまだ断絶が見られ、ナショナリズムの浸透はそれから漸進的に進んでいった。それは、産業革命以降大衆を取り込む必要から選挙権の拡大が行われたこと、識字率の上昇とメディア・交通の発達によって、共通の高度な文化が普及し、それによってネーションを「想像」することが可能になったこと、などゲルナーやアンダーソンの理論の正しさを証明する点が多い。彼らの理論は、ナショナリズムの社会的起源よりも、その浸透を説明するのに適しているといえる。とはいえ、フランスという外敵の存在がここでも決定的に重要であったこと、帝国の繁栄によってイングランド人であること自体が威信の源泉となったことなど、彼らが見逃している点も少なくはない。そして、私の理論で言えば、この19世紀末までに、イングランド内部はほぼ完全に同化されてネーションを形成している。そして、その後のスタトゥス、すなわち大英帝国の膨張の中で他のエトノスも同化しようと試みるが、結局失敗し、それに抵抗する多くのナショナリズム、エトノシズムを生み出していくのである。

また、歴史的連続性に関する議論についても更に説明を加えなければならないだろう。イングランドという領域的単位は中世から存続しており、その連続性が近代における諸エトノスの同化過程において重要であったことは間違いない。支配者は歴史と伝統を強調することで、農民などの取り込みを容易に行おうとしていた。これを、「伝統の捏造」として歴史的断絶を強調することも可能だが、イングランドの場合、実際に同化過程が始まる時点で長い歴史と伝統が存在していたため、それによって人々の非合理的な感情に訴え、

ナショナリズムを浸透させていくことが容易であったのである。

また、ここで注意しなくてはならないのは、スミスの主張を証明するように[A.D. Smith]、自集団を文化的に他の集団と区別し、そのすばらしさをたたえて団結を強め、外的に対抗するというエトノシズムの核心とも言える行動形態は、アルフレッド王の時代からかなり普遍的に見られるということである。これと近代のナショナリズムとの違いは、一ネーション（エトノス）に属する人間の数が増えたという量的な規模の拡大と、一個人にとってネーションがより一元的に忠誠を要求する存在となってきたという質的な規模の拡大の二つである。前者はゲルナーが言うように、産業化という時代の流れに伴う民衆の権利の拡大やアンダーソンが言うような「想像力」の発展から理解できる。より難解なのは後者であり、なぜネーションが宗教や階級といった対抗グループに打ち勝ち、アイデンティティーの中心となり得たかは明確に説明されていない。最も重要なのは変更可能性という点であろう。本人にとってはもちろん、次の世代で変更可能という程度でさえ、その集団に対するアイデンティティーを弱めるのに十分である。宗教の影響力が薄れている原因も、それが次第に容易に変更可能になってきたからであると考えられる。そして、イングランドはヘンリー8世の改宗に見られるように、そうした傾向の最も強かった地域であり、それがネーション発祥の地であることも偶然ではない。また、階級についても最も早い時期に階級間の流動性を実現し、更に選挙権の拡大などでその障壁を崩す試みをしてきたのがイングランドである。こうした理由から、宗教や階級などの変更可能な集団から、そこに生まれ落ちた以上変更することができないと考えられているエトノス（ネーション）に対するアイデンティティーが強まっていったのだと考えられる。今後もこのようなネーションの神話が維持され、その変更不能性が保たれるかどうかは定かでない。しかし、同化を進め、エトノスの範囲を拡大するのに大きな役割を果たしたメディアや交通が更に発達し、EC統合も現実のものとなった現在、もう一回り大きなレベルの単位にアイデンティティーが移行していく可能性も十分に考えられるといえよう。

注

- (1) それはしかし、ある時点で限界を示し、例えばイングランドの場合では、スコットランドやウェールズなどの同化できない別個のエトノスを生み出すことになる。
- (2) [Gellner:p.1]。ゲルナーの定義は現在のところ最も簡潔にして適切なものと考えられており、これと大幅に異なる定義は少ない。
- (3) ゲルナーも、抗エントロピー（同化を拒む要素）という概念を持ち出して、生物学的特質が歴史的・地理的な意味付与をなされた場合や、文化的特性が宗教的信仰を伴う場合などに同化が阻害されるとしている。しかし、それも前近代における文化的差異をア・プリオリに前提しており、そこでの歴史的経験はやはり軽視されているといわざるを得ない。

- (4) アンダーソンは、ナショナリズムの起源がそれぞれの種類のそれに対して存在し、複数であると考えているようである。このような捉え方にも当然利点はあるのだが、ナショナリズムを近代において普遍的なものとする以上、その起源をひとつに絞り込んでみようという試みも無意味ではないだろう。
- (5) ただし、この二つの間の区別はしばしば困難であり、例えばケベックやスコットランドのように、どちらとも判然としがたいものも多いが、それらの分析においてもこの区別は有益と思われる。
- (6) ただし、「ソールズベリーの誓約」は10世紀半ばのエドムンド王の法典に同様の志向が見られるし、「ドゥームズ・デー調査」もサクソン王朝時代に機能しつつあった地方統治組織の存在によって可能になったのであり、また10世紀末からの全国的地租「デーンゲルド」をカヌートが11世紀前半に一手に納めようとしたことの延長でもあり、いずれもサクソン王朝の遺物を発展させたものであるともいえる[青山:pp.326,375]。
- (7) 貴族とはここでは、伝統を持つ旧貴族を指す。
- (8) ここでは近代についての定義には立ち入らず、ごく一般的に15世紀から16世紀のチューダー朝成立と宗教改革のころからとする[越智:pp.5-6]。
- (9) もちろん、ゲルナーもこのことに気づいており、イングランドは社会的流動性が産業化に先立って存在した例外的な地域だとしている。彼自身も言うように、このことが彼の議論全体を損ねることはないが、ナショナリズムの起源を考えるに当たっては、これは大きな矛盾であるといわざるを得ない[Gellner:pp.91-2]。また識字率の上昇も、ゲルナーの言うような産業化の影響だけではなく、初期の段階では契約制度が発達してきた中で、名前を署名できることが必要になってきたことの影響からでもあった[ライトソン:p.327]。
- (10) ただし、地方においては土着のジェントリが大きな力を持ち、王は彼らを統率すると共に、その要求もある程度受け入れねばならなかった。
- (11) ここでひとつ注意しておくべきは、この時期はもちろん、ハノーバー朝がウィンザー朝に名前を変える第一次大戦の頃まで、国王が外国人であることが問題になることはなかったということである。これは、王が実権を持たない象徴であったからとも言えるが、むしろ、ヨーロッパ世界をひとつのまとまりと考える中世の貴族支配体制の名残と捉えるべきだろう。
- (12) ただし、ナショナリズムを大衆の動員のために利用することに関しては、支配者の側もアンビバレントであった。というのも、ナショナリズムが普及すれば、例えばネーションのために軍隊に行く以上、その政治に参加する権利が与えられるべきだというように、大衆が権利の拡大を要求してくるのは明白であったからである。しかし、全体としては、支配者にとってナショナリズムは、「反対するよりも奨励するべきもの」であったようである[Colley:pp.109-15; Dinwiddy:p.69]。
- (13) この時期には、他の地域ではエトノスや地域を単位とした対立が多く見られたおり、階級が対立の焦点となること自体、エトノス・地域レベルでの統一が果たされていたことの証明であるとも言える[Colley:p.116]。

参考文献

- Anderson, Benedict, (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, (Revised Edition) (Verso)
- 青山吉信(1978)『イギリス封建王制の成立過程』、東京大学出版会
- Colley, Linda, (1986) 'Whose nation? Class and national consciousness in Britain 1750-1830' in *Past & Present* 113.
- Cottrell Stella, (1989) 'The Devil on two sticks: franco-phobia in 1803' in Samuel, Raphael(ed), *Patriotism: The Making and Unmaking of British National Identity I: History and Politics* (Routledge)

- Dinwiddy, John, (1988) 'England', in Dann, Otto and Dinwiddy, John(eds), *Nationalism in the Age of the French Revolution* (The Hanbleton Press)
- Gellner, Ernest, (1983) *Nations and Nationalism* (Cornell University Press)
- Greenfeld, Liah, (1992) *Nationalism: Five Roads to Modernity* (Harvard University Press)
- Hilton, Rodney, (1989) 'Were the English English?', in Samuel, Raphael(ed), *Patriotism: The Making and Unmaking of British National Identity I: History and Politics* (Routledge)
- Hobsbawm, E.J., (1990) *Nations and Nationalism Since 1780* (Cambridge University Press)
- 川北稔(1972)「工業化前イギリスの社会と経済」、柴田三千雄・松浦高嶺編、『近代イギリス史の再検討』、御茶の水書房
- Kohn, Hans, (1961) *The Idea of Nationalism* (The Macmillan Company)
- 三好洋子(1967)『イングランド王国の成立』、吉川弘文館
- 村岡健次 川北稔編(1986)『イギリス近代史—宗教改革から現代まで—』、ミネルヴァ書房
- Newman, Gerald, (1987) *The Rise of English Nationalism: A Cultural History* (Weidenfeld & Nicolson)
- 越智武臣(1966)『近代英国の起源』、ミネルヴァ書房
- 大野真弓(1977)『イギリス絶対主義の権力構造』、東京大学出版会
- Reynolds, Susan, (1984) *Kingdoms and Communities in Western Europe, 900-1300* (Oxford University Press)
- Smith, Alan G.R., (1984) *The Emergence of a Nation State: The Commonwealth of England* (Longman)
- Smith, Anthony D., (1986) *The Ethnic Origins of Nations* (Blackwell)
- Snyder, Louis L., (1990) *Encyclopedia of Nationalism* (Paragon House)
- G・M・トレヴェリアン 大野真弓監訳(1973)『イギリス史1』、みすず書房
- 筒井清輝(1994)「ナショナリズム概念の再構成——エトノシズム・ナショナリズム・スタトゥシズム——」、『ソシオロジ』119号
- キース・ライトソン 中野忠訳(1982)『イギリス社会史1580-1680』、リプロポート

(つつい きよてる・修士課程)

In Search for the Origin of Nationalism: The Formation of Nationalism in England

Kiyoteru TSUTSUI

The purpose of this paper is to consider the origin of nationalism, which is said to be found in the history of England. For this purpose, first, I will examine two major theories on the origin(s) of nationalism, Gellner's and Armstrong's, and point out some of their weaknesses as well as merits. Gellner contends that nationalism is a modern phenomenon produced by the particular social condition of industrial society; the existence of social mobility and mutually communicable high culture. Anderson lays more emphasis on culture, arguing that the collapse of the religious view of the world and prevalence of print-capitalism made possible the imagining of a nation. Incorporating these and some other scholar's theories, I will then re-introduce my own theory of 'ethnosism, nationalism, statusism'. Ethnosism refers to the social and political claims of ethnos (\approx ethnic group), statusism to those of status (\approx state), and nationalism to those of nation, which is the composite form of ethnos and status. This theory has the advantage of being ideal-type and universal, and therefore being applicable to the wider range of history. To evaluate the validity of these theories, I will apply them to the history of nation-formation in England.

In contrast to Gellner's and Anderson's theory, I will argue that English unity as a status and identity as an ethnos emerged in the early 16th century, predating the influence of industrialization and print-capitalism. This state of unity has undergone a long process of evolution, influenced by the Heptarchy days, the Norman Dynasty period, loss of its territory in France, realization of social mobility after the Wars of the Roses, and the Reformation, which, unlike Gellner's contention, clearly proves the historical continuity of English nation. Among these events, the Reformation is the most important in that it attained the congruence between cultural and political units, which is the essence of nationalism. Thereafter, English national identity, first fused with Protestantism, was transformed into a secular idea, and in spite of class division, affected more and more people from the lower strata. This became possible, mostly because England was the center of the great British Empire; being English was of itself great prestige, and social promotion and acquisition of wealth were indeed attainable at that time. Furthermore the constant threat of the enemy in France and other Catholic influence was of great importance in forging and disseminating the English national identity.